

## No.11 ■祭事による地域アイデンティティの形成 —五所川原市における立佞武多を例にして—

環境文化史学研究室 齊藤 慶

### 1. はじめに

21世紀の基幹産業は観光になるという予想が本当であるならば、青森県は「ねぶた」という強力な切り札を持っていることになる。全国的に有名なものには「青森ねぶた」「弘前ねぶた」があるが、私の出身地である五所川原市も例外ではない。近年、見事に復活を遂げた夏祭り「五所川原立佞武多」は、今では100万人を超える集客数を誇り、大きな観光資源となっている。さらに、立佞武多は中心市街地の活性化の材料であるため、または他のまちとの差別化を図るため、市内では至るところに立佞武多を利用したものを見ることができ、市を象徴する存在にまで成長したということが出来る。観光は、現代の巨大な現象になっているばかりでなく、地域住民のアイデンティティと深く結びつくようになっている。そこで、立佞武多は五所川原市民にとってどのような意味をもっているのか、まちとして存在するアイデンティティを創造していく過程について考えたい。

### 2. 五所川原市立佞武多

#### ① 五所川原市の概要

五所川原市は、津軽平野のほぼ中心に位置する人口約5万人の都市である。50年代までは、高度成長と周辺市町村の稲作が順調だったこともあり、行政・医療・教育・文化のさまざまな面で津軽西北五地区の中核都市として発展してきたが、近年は中心市街地において、大型店の廃業・移転・撤退、公共施設の郊外移転、急激なモータリゼーションの進展等の要因により、大規模の遊休地の発生や空店舗の増加、歩行者交通量の減少など空洞化が進行し、若年層の流出など多くの問題を抱えている。

#### ② 五所川原立佞武多について

五所川原立佞武多は毎年8月3～8日に行われる。3日は岩木川河川敷にて花火大会が開催され、立佞武多の運行は4日～8日に中心市街地の全長1.5kmある運行コースで行われる。

祭りの主役である立佞武多の特徴はその大きさにある。高さは年によって異なるが、20mを超え（台座10m、人形12m）、総重量は16tにのぼる。

立佞武多の製作は五所川原市役所職員の三上正輝氏や三上敦行氏等により、五所川原市役所の隣にある立佞武多製作所で行われている。五所川原立佞武多は、

過去2年間のもの2台とその年の新作1台が運行されるため、祭りが終わるとすぐに来年に向けての修理作業が行われる。1台目はその年の12月までに、2台目は年が明けた3月までに修理を終え、4月から新作の製作を始める。作業は20数パーツに分割して進められるため、祭りの1週間前に組み立てられる。立佞武多のテーマは、時事的なものや五所川原にふさわしいものになっている。

### 3. 立佞武多をめぐる一連の動き

明治時代、勇壮な姿で市内を練り歩いていた10間（約20m）以上にも及ぶ巨大ねぶたは、大正時代に電気が普及し、電線が張り巡らされると、次第に背丈が低くなり、ねぶた祭りの賑わいを失っていた。しかし、平成8年に1枚の写真と市民が保管していた台座の設計図をもとに、有志により復元された20mを超える巨大ねぶたは「立佞武多」と命名され、平成10年には、市が立佞武多の支援を決め、運行を決定した。立佞武多が市内を練り歩けるよう、運行コースを横切る電線等を埋設、道路の凹凸をなくするなど、インフラなどの整備が急ピッチで行われ、8月5日から始まる市の夏祭り「虫おくりと火まつり」に、市民の参加を得て作られた「親子の旅立ち」が登場した。この年、夏祭りに訪れた県内外からの観光客は、前年を7万人上回る65万人を記録し、祭りを大きく様変わりさせた。その後、立佞武多は毎年1台ずつ作られ、夏祭りの主役となり、知名度とともに動員数も上がっている。

### 4. 立佞武多との関わりかた

#### ① 起爆剤としての立佞武多

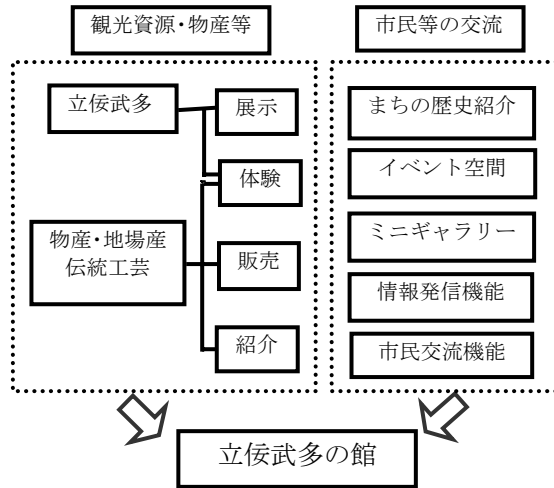
五所川原市は、現在抱えている深刻な状況を打開するために、全国的に知名度が上がっている立佞武多を起爆剤とした中心市街地の再生を目指している。目標テーマを「立佞武多に会えるまち～文化の薫るハイカラなまち：五所川原～」とした五所川原市中心市街地活性化基本計画を構想した。基本計画は以下のとおりである。

- ・ 西北五地区における中心市街地づくり
- ・ 賑わい・活気のある魅力的な商業集積・商業空間づくり
- ・ 多世代が交流し・集い・賑わうことのできるまちの魅力づくり
- ・ 立佞武多に代表される本市固有の歴史・文化を感じられるまちづくり
- ・ 生活のしやすさを感じられる環境づくり

本計画の主要プロジェクトは「(仮称)立佞武多の館」(以下、「立佞武多の館」とする)の建設である。「立佞武多の館」は観光資源としての機能と地域文化とし

ての機能を兼ね揃えている。現在ある立佞武多に関連するものは、すべてこの施設に移される予定である。立佞武多の館は、平成14年12月に着工され、16年3月に完成予定である。

#### 立佞武多の館：導入機能イメージ



また、本計画における整備事業は、立佞武多の運行をスムーズにするため、または立佞武多の見学をしやすくするために行われる場合が多い。例としては、車道や歩道の拡幅、既存のアーケード修景、電線等の埋設に伴う電柱の撤去などである。これらは、祭り見物にきた県内外からの観光客の不満の声に基づく改修工事であるといえる。

#### ② 観光的側面からみた立佞武多

年を追うごとに、集客数が増えてきている立佞武多だが、経済効果という見地からみるとまだまだ課題は多い。これについては、行政・民間・第3セクターなどで協力しつつ、構想を練っている段階である。また、他県に対してのPR活動が不足しているため、強化していく必要がある。

五所川原市には、「五所川原立佞武多」のほかに「奥津軽虫と火まつり」という大きな祭りがある。かつての夏祭りは、ねぶたの運行と虫おくり行事を一緒に行っていたが、立佞武多が復活し注目度が高まった結果、虫おくり行事の日程が移され、立佞武多が夏祭りの主役になった。以前の五所川原市のシンボルは、虫おくりの虫をモチーフにしたマスコット「ムッシーくん」であり、活性化に用いられていたが、今では五所川原市のシンボルという立佞武多になり、活性化を目的とし市内のあちこちで利用されている。

#### ③ 地域文化からみた立佞武多

地域の文化として立佞武多をみた場合、一番重要となるのは後継者の育成である。そのため、行政では、小中学校で立佞武多について講演したり、実際に製作体

験を行ったり、夏祭りの時期が近づくとお囃子の講習会を開いている。製作体験（紙貼り体験）は経験の有無を問わず、無料で誰でもできるため観光客にも人気であるが、小学校の総合学習の一環として利用されることも多い。製作の段階に参加することにより、祭りに対する愛着と誇りをもつことができるため、住民意識を高揚させる効果があるといえる。また、アーケード街を飾る金魚ねぶたも市内の小学校の児童により製作されている。

現在、五所川原立佞武多には、市内の高校3校が参加しているが、実際に製作者が指導したり、製作場所を提供したりと、地域が一丸となって伝統や歴史を継承していこうとしている姿勢が見受けられる。

## 5. 考察

立佞武多は、地元有志の趣味から始まり、地域の活性を担うものとして行政に委ねられ、立場が大きく変化した。明治時代の巨大ねぶたは、観光ではなく地域の祭りとして行い、大地主や豪商などの意地の張り合いによって巨大化したものであるが、現代の立佞武多は行政が大きく関与しているため、復活した過程などをみても観光色の強さは否めない。

普通、アイデンティティというと、「差別化」を取り上げる。事実、五所川原市も他のまちとは違う「ねぶた」で差別化を図り、誇りに思っているが、それ以上に、五所川原のアイデンティティは「同質化」にあるように感じる。市民は、復活された立佞武多を誇りに思い、かつての活気を取り戻すために、市民・行政・民間が一丸となって再生に取り組んでいくというように、みんなが同じ方向を向いている。それは、製作の段階から現れ、自分達で作ったものだからこそ誇りや自信をもち、自分の存在を示していることによる。

結局のところ、あまり気張らずに、誇りに思えるような何かを創り、目立たせたり、大切に守ったりしていることで、漠然とした単位である地域に「わたしのまち」を感じることができたのではないかと考えた。

## 6. おわりに

地域アイデンティティは、まちと住民が関わりあう時間の経過のなかで形成されていき、自分の思いを込められる空間や事物、出来事がどれだけ蓄積されているかが重要なことになっている。立佞武多も虫おくりも農業生産と生活のために行われていた伝統ある文化である。立佞武多は自分達もっている文化的なシンボルの総体として蓄えられていたものを地域の人たちが再現したため、地域の人たちのアイデンティティを高める有力な手段になったと考えられる。